

## 祢軍墓誌再論

西本昌弘

はじめに

祢軍は中国人を先祖にもつ百済の高官で、六六〇年の百済滅亡に際して唐に帰順し、その後、唐と倭国、唐と新羅の間に立って、外交交渉に活躍した人物である。二〇一一年に中国西安で祢軍墓誌が発見されると、その内容をめぐって日中の研究者が議論を交わすようになった。私も二〇一三年に祢軍墓誌の「日本」や「風谷」に関する拙稿を発表したが<sup>①</sup>、当時の東アジア情勢に対する研究史の把握が十分でなく、祢軍墓誌の字句の解釈についてもいくつかの批判を受けた。

そこで本稿では、そうした批判に応えるとともに、六六〇年代前後の唐・倭国・百済・新羅の置かれた状況に関する研究史を振り返りながら、祢軍墓誌に記された祢軍の功績や昇進過程に再検討を加え、前稿の不備を補うことにしたい。

### 一 前説の修正と再確認

前稿における結論は次のようである。

- ① 祢軍墓誌にみえる「日本」は国号ではないが、ここにみえる「日本」「扶桑」「風谷」「海左」「瀛東」はいずれも倭国をあらわす別称として使用されている。
- ② 「日本の余嚙」と「風谷の遺毗」はともに倭国に逃れた百済遺民を意味する。
- ③ 東野治之は「風谷の遺毗」は高句麗の遺民を意味すると解釈したが、このとき高句麗はまだ滅亡していなかったから、高句麗の勢力を「遺毗」と称したとは考えにくい。
- ④ 「万騎野を巨り」と「千艘波を横ぎり」の対句表現は、「日本の余嚙」や「風谷の遺毗」すなわち倭国がまだ大きな陸海の軍勢を有していることを述べたものとみられる。
- ⑤ 六六四年と六六五年の二度倭国に來航した祢軍の任務は、百

済遺民を含めた倭国の勢力を熊津都督府へ招き寄せることであり、この任務を果たした功績が祢軍墓誌で強調されている。

⑥ 祢軍墓誌に「僭帝、一旦臣を称す。仍りて大首望数十人を領して、将に入りて朝謁せんとす」とあるのは、倭国にいる百済王善光が一度王号を返上したこと、また百済王族・貴族ら数十人を率いて熊津都督府に赴くことを約束したことを意味する。

⑦ ⑥の約束は果たされなかったようで、倭国はその名代として守大石らを唐使を送る使として熊津都督府に派遣した。彼らはこの年八月に行われた熊津城会盟に参加した可能性が高い。

以上の結論の多くは現在でもこれを維持するものであるが、いくつかの点については、考証に不備があったり、表現に誤りがあったりしたために、批判を受けることになった。これらの批判の多くは素直に受け入れざるをえないものである。

第一に②について、葛継勇・井上巨と富谷至から、「日本」を倭国の意としながら、「日本の余嚙」を倭国に逃れた百済遺民と読むのは、古代漢語の語法的に無理があると批判された<sup>②</sup>。この指摘はたしかにその通りであって、批判を甘受せざるをえない。私見の主旨に照らすと、「日本の余嚙」は倭国の残党と理解すべきであって、百済救援のために派遣され、白村江の戦いなどで敗北した倭国の軍勢をさすと再定義することにした。

『日本書紀』天智二年（六六三）八月条には、「日本の船師」が大唐の船師と白村江で合戦して敗北し、同年九月条には、「日本の

船師」と旧百済貴族の左平余自信らが「日本」に向かったとある。中国史料では、龍朔三年（六六三）に唐軍が白江の口において「倭兵」と戦って潰滅させ、百済の「偽王子夫余忠勝」らと「倭衆」などが降伏したという（『旧唐書』劉仁軌伝）。これらにみえる白村江の戦いに破れ、倭国に撤退した「日本の船師」「倭兵」「倭衆」を祢軍墓誌は「日本の余嚙」と表現していると考えるのである。

第二に③についても、葛継勇と井上巨から批判を受けた<sup>③</sup>。唐代の文献には高句麗滅亡以前に「高麗余燼」（『冊府元龜』卷九九六、外臣部、責讓、貞觀二十年十月壬申条）、「高麗逋藪」（『旧唐書』劉仁軌伝）などの用例がみられるので、「風谷遺叱」も高句麗が反乱を起こしたことをさすとみて問題ないというのである。この批判ももつともであり、前稿での結論③は根拠薄弱であったと認めざるをえない。祢軍墓誌にみえる「余嚙」や「遺叱」を亡国の民と理解したことによる誤りであった。ただし、祢軍墓誌に高句麗のことが言及されているとは思われず、後述するように、「風谷の遺叱」とは倭国軍兵の残党であると解釈できると考える。

第三に⑦についても問題がある。祢軍らの働きかけに応じて、倭国から守大石らの使節が送使として熊津都督府に派遣されたのみだが、彼らはこの年八月に行われた熊津城会盟に参加した可能性が高いと述べたのは失考であった。天智四年（麟徳一年、六六五）七月に対馬、九月に筑紫に到着した唐使の劉徳高・祢軍らの「招慰」を受けた倭国が守大石を派遣したとしても、彼らが八月に

熊津城会盟に参加することは日程的にみても困難であるからである。また、守大石らを唐使の送使とみた点についても再考が必要である、ただし、二度来航した唐使が倭国の使者を熊津都督府に引き寄せる任務をもっていたであろうことは、現在においても否定できないと考えている。詳しくは後述することにした。

以上、前稿で述べた②③⑦の結論については、上記のように訂正することにした。それ以外の結論はこれを維持するものであるが、とくに④については補強材料を追加しておきたい。後述するように、天智四年（六六五）七月に再来した劉徳高・祢軍らの唐使は筑紫から飛鳥の王宮に向かい、菟道（宇治）での「大閱」に際会した。筑紫から難波までの航路上では多数の軍船を目撃したのであろうし、菟道の「大閱」では騎馬を含めた軍兵を目にしたことであろう。倭国におけるこうした実体験が「万騎野を亘り、蓋馬と与に以て塵を驚かし、千艘波を横ざり、原地を援けて沓（沓・瀾の異体字）を縦にす」という対句で表現されたものと思われる。

さて、祢軍墓誌に記された「日本」「扶桑」「風谷」「盤桃」などの語句が示す内容については、次のような意見が出されている。

- ・「日本」「風谷」は倭国をさす……王連龍<sup>5</sup>
- ・「日本」は百濟、「風谷」は高句麗、「海左」「瀛東」は倭国をさす……東野治之<sup>6</sup>
- ・「日本」「風谷」「扶桑」「海左」「瀛東」は倭国をさす……西本

## 昌弘<sup>7</sup>

- ・「日本」は百濟、「風谷」「扶桑」は高句麗、「盤桃」は百濟、「海左」「瀛東」は朝鮮半島をさす……葛継勇<sup>8</sup>
- ・「日本」は倭国、「風谷」は高句麗をさす……井上亘<sup>9</sup>
- ・「日本」は百濟、「扶桑」は倭、「風谷」は高句麗、「盤桃」は新羅をさす……李成市<sup>10</sup>

・「日本の余嚙」は倭国にいる豊璋、「扶桑」は倭国、「風谷」は百濟、「盤桃」は高句麗をさす……氣賀澤保規<sup>11</sup>

- ・「日本の余嚙」は百濟や旧加耶などにいた倭人系集団や倭系百濟官僚の残党、「扶桑」は倭国、「風谷」は百濟、「盤桃」は新羅をさす……小林敏男<sup>12</sup>

以上のように、これまでの研究では、「日本」は百濟か倭国、「風谷」は高句麗、「扶桑」は倭国をさすとする意見が多数を占めているが、それ以外の意見も少なくなく、定まった見解がない状態が続いているといつてよい。ただし、早稲田大学の古代東アジアゼミナールや葛継勇が詳論しているように<sup>13</sup>、古代文献の用例検索からみると、「日本」「扶桑」「風谷」「盤桃」「海左」「瀛東」はいずれも中国からみて東方の地域をさす語であることが明らかなので、その意味では、「日本」「風谷」などは東方の国ならば百濟・高句麗・新羅・倭国のいずれをさす語ともなりうるものである。

したがって、祢軍墓誌にみえる「日本」「風谷」などの語が示す対象については、墓誌の誌主である祢軍の経歴と成し遂げた

功績を踏まえて考えてみる必要がある。以下、祢軍の事跡について検討することにした。

## 二 祢軍の事跡からみた墓誌記載の功績

祢軍の事跡は日本と朝鮮の史籍のなかに記録されている。

まず、『日本書紀』と『善隣国宝記』によると、天智三年（六六四）四月、唐使郭務悰とともに「百濟佐平」の祢軍らが倭国の対馬島に來航し、（おそらく筑紫大宰の）別館に場所を移して十二月まで外交交渉を行ったが、倭国の朝廷は彼らは百濟鎮將の私使であるとして、入京を許さず、唐使がもたらした牒書は口頭で奏上されるとともに、筑紫大宰からの返書という形式をとった牒書を唐使に手渡して帰国させた。

翌天智四年（六六五）九月には、唐使の劉徳高・郭務悰とともに「右戎衛郎將上柱国」の祢軍が來航した。彼らは七月に對馬、九月に筑紫に着き、表函を進上した。十月己酉（十一日）には菟道（宇治）で「大閔」（大規模な閔兵）<sup>14</sup>が行われ、十一月辛巳（十三日）には劉徳高らを饗し、十二月辛亥（十四日）には劉徳高らに賜物があり、この月に劉徳高らは帰国の途について。

中臣鎌足の息定恵は乙丑年（天智四年）に劉徳高らの船に付されて帰国した（『日本書紀』白雉五年二月条所引伊吉博徳書）。『藤氏家伝』貞慧伝によると、唐の高宗は劉徳高らに詔して長安で研鑽を積んでいた貞慧（定恵）を倭国に送らせ、貞慧は白鳳十六年

乙丑年九月に百濟を経て京師に來歸したという。劉徳高らは唐都から高宗の国書（表函）を携えて倭国に來航したものと思われる。『懷風藻』には劉徳高が大友皇子の骨相をみたという話が伝えられるので、劉徳高らの一行は当時の王宮であつた後飛鳥岡本宮に至り、十月中旬から十二月初旬までの約二カ月弱、倭国の朝廷と外交交渉を行ったことになる。

一方、『三国史記』新羅本紀、文武王十年（六七〇）七月条には、新羅王が「百濟殘衆」の反覆を疑い、大阿湊儒敦を熊津都督府に遣わして和を請わせたところ、（熊津都督府は）これに従わず、「司馬」祢軍を派遣して「窺覘」せしめた。文武王はその謀事を知り、祢軍を留めて送り返さず、拳兵して「百濟」の諸城を抜いた。文武王十一年七月二十六日条が引く「大王報書」には、咸亨元年（六七〇）六月に「高句麗」が謀叛したとき、熊津都督府から「百濟司馬」の祢軍が新羅に來て、（熊津都督府と新羅との間の）人質交換のことを話し合つたという。文武王十二年（六七二）十二月九日条によると、新羅王が唐への謝罪使を派遣した際に、新羅に抑留していた唐の官人王芸・王益らと兵士一七〇人を送還したが、そのなかに「熊津都督府司馬祢軍」の名がみえる。

以上を要するに、日本と新羅の史書のなかに残された祢軍の事跡は、第一に六六四年と六六五年に倭国に派遣されて外交交渉にあつたこと、第二に六七〇年に新羅に派遣されて外交交渉にあつたが、新羅に抑留されて六七二年に解放されたことの二件で

あるということになる。殿軍墓誌に記された祢軍の功績はこのうちのどちらに相当すると考えられるのか。

王連龍は、祢軍墓誌の「日本余嚙」、「風谷遺配」の一節は祢軍が日本に遣わされた事跡を書きとめたものとし、私も祢軍墓誌の多くが倭国へ派遣された際の功績を書いているとみた。<sup>16</sup> また井上亘は、祢軍の功績は倭との二度にわたる交渉以外に想定することはできないとし、<sup>17</sup> 水野実らも、祢軍のもっとも顕著な功績は倭国への派遣とその成果で、墓誌はそのことを記すと説き、<sup>18</sup> 小林敏男も、祢軍墓誌を解釈する上で、祢軍の二度にわたる倭国への派遣は注目されると述べる。<sup>19</sup>

これに対して葛継勇は、祢軍墓誌は祢軍の倭国出使については触れていないとし、李成市も同様の立場に立つ。<sup>20</sup> 富谷至はこの時期、唐側に懸案となっているのは百済と高句麗の動向であり、祢軍墓誌には百済と高句麗の二つの国が取り上げられているとする。<sup>21</sup>

この問題を解く一つのカギは祢軍が帯した官の変遷である。『日本書紀』天智四年（六六五）九月壬辰条によると、祢軍はこの年七月に來航した際に右戎衛郎將の官を得ており、『三国史記』をみると、祢軍は文武王十年（六七〇）六月（または七月）に新羅に派遣された際には熊津都督府司馬となっていた。そして祢軍墓誌では、祢軍は「特に帝に在簡せられて、（某国に）往きて招慰を尸」した結果、「特に恩詔を蒙りて左戎衛郎將を授けられ、少選くして右領軍衛中郎將兼檢校熊津都督府司馬に遷さ」れたという。

これらの史料を検討して、井上亘は祢軍は第一回の倭国派遣後に右戎衛郎將（正五品上）、第二回の倭国派遣後に左戎衛郎將（正五品上）に転じ、その後、倭との折衝成功によって檢校熊津都督府司馬に榮進したとみた。<sup>22</sup> 右領軍衛中郎將（正四品下）への遷任時期が問題として残るが、井上説は残された史料と対照して整合的であり、支持できるものである。

一方、葛継勇は『日本書紀』天智四年（六六五）条の右戎衛郎將は左戎衛郎將の誤りであると、祢軍は六七二年に新羅から唐に戻された後に右領軍衛中郎將兼熊津都督府司馬に任命されたと考えた。<sup>23</sup> 葛は祢軍墓誌にみえる「特に恩詔を蒙」った昇進を六七二年の新羅からの帰還後のこととみるのであるが、かりに『日本書紀』の右戎衛郎將を左戎衛郎將の誤りであるとすると、祢軍は六六五年の段階ですでに左戎衛郎將であったのに、六七二年に「特に恩詔を蒙」った結果、同じ左戎衛郎將に昇進したという不可解な官歴を導き出すことになる。また、祢軍は六七〇年の新羅出使時に熊津都督府司馬の官を帯びていたから、六七二年に檢校熊津都督府司馬に任命されたというのでは、年次が齟齬することになる。<sup>24</sup> 葛は新羅出使以前に祢軍は熊津都督府司馬に任じられていたと推測するが、この推測は根拠薄弱であり、従うことができない。結局、井上亘の解釈が妥当であり、祢軍は第二回倭国出使時の功績を賞されて右戎衛郎將から左戎衛郎將に転じ、まもなく熊津都督府司馬に遷任したと考えられるのである。



それでは、墓誌にみえる右領軍衛中郎將への任官はいつのこととみればよいのか。『旧唐書』職官志一に、

龍朔二年二月甲子、改百司及官名。……左右領軍衛為左  
右戎衛<sup>一</sup>。

とあり、『新唐書』百官志四上に、

龍朔二年、……左右領軍衛曰左右戎衛。……咸亨元年、改<sup>二</sup>

左右戎衛曰領軍衛<sup>一</sup>。

とあり、『新唐書』高宗紀、咸亨元年十二月庚寅条に「復官名<sup>一</sup>」とあるので、龍朔二年（六六二）二月に左右領軍衛が左右戎衛に改名され、咸亨元年（六七〇）十二月に左右戎衛が左右領軍衛に復されたことがわかる。したがって、祿軍が左戎衛郎將から右領軍衛中郎將に昇進したのは六七〇年十二月以降ということになる。

ただし、『新唐書』高宗紀、咸亨元年四月庚午条に、

高麗酋長鉗牟岑叛、寇遼<sup>一</sup>。……右領軍衛大將軍李謹行為<sup>二</sup>燕  
山道行軍總管<sup>一</sup>、以伐<sup>レ</sup>之。

とあり、「右領軍衛大將」の官名がみえるので、右領軍衛の名は咸亨元年の四月には用いられていたことが想定できる。となると、祿軍が右領軍衛中郎將に昇進したのは咸亨元年四月ごろとみてよいのではないか。そう考えて大過ないとすると、祿軍は咸亨元年四月ごろに右領軍衛中郎將兼檢校熊津都督府司馬に任命されたのち、同年六月あるいは七月に新羅へ派遣され、新羅王によって新羅に抑留されたということになる。

以上から、祿軍が「特に恩詔を蒙りて」左戎衛郎將を授けられ、しばらくして右領軍衛中郎將兼檢校熊津都督府司馬に遷されたのは、六七〇年四月ごろのこととみるべきであろう。祿軍は六七〇年の六月か七月に新羅に出兵して抑留され、六七二年に解放されたが、左戎衛郎將や右領軍衛中郎將兼檢校熊津都督府司馬などの官に昇進したのは、六七二年に新羅から戻されたあとではなく、二度にわたる倭国への出兵後のことと考えられるのである。

したがって、祿軍墓誌に祿軍の功績として記述されるのは、倭国への出兵時のものであり、ここにみえる「日本」は倭国のことであるということになる。

### 三 「僭帝」とは誰か

祿軍墓誌には、「僭帝一旦称<sup>レ</sup>臣。仍領<sup>二</sup>大首望數十人<sup>一</sup>、將<sup>レ</sup>入<sup>二</sup>朝謁<sup>一</sup>」という一節がある。祿軍が「特に恩詔を蒙りて」叙任されたことに関わるこの一節は何を意味しているのか。冒頭の「僭帝」については、以下のような見方が唱えられている。

#### (1) 高句麗王説

王連龍は総章元年（六六八）の高句麗滅亡に際して、その王高藏、泉男建・男産らと多くの首領が捕虜となり唐に移されたことをさすとし、祿軍は高句麗滅亡においても戦功を立てたとみた。<sup>(25)</sup> 葛継勇は高句麗が乾封元年（六六六）に高宗の泰山封禪に参加し

たのは、祚軍の出兵・説得によつたものと考え、この出来事は「僭帝一旦称<sub>レ</sub>臣」という一節と一致していると論じた。<sup>25)</sup>

しかし、祚軍が高句麗に派遣されたという史料は残されていない。井上亘が批判するように、祚軍は高句麗に派遣されたかもしれないという考えは、史料的根拠のない憶測にすぎない。<sup>27)</sup>「僭帝」＝高句麗王説は根拠薄弱である。

### (2) 倭王説

井上亘は「僭帝」を倭王すなわち中大兄皇子をさし、「大首望數十人を領し」は守大石らの遣唐使をさすとみる。<sup>28)</sup>井上は倭王が「天兒」「日出処の天子」などと称した隋代の事跡をもつて、唐側が倭王を「僭帝」と称した理由にあげるが、唐代の六六〇年代に倭王を「僭帝」と呼ぶ根拠としては弱いといわざるをえない。

### (3) 新羅王説

李成市は『三国史記』文武王十二年(六七二)九月条に、新羅がそれまで国内に抑留していた唐人や熊津都督府の武将らとともに謝罪使を唐に遣わしたと著録されていることが、祚軍墓誌の「僭帝一旦称<sub>レ</sub>臣」云々という記事と符合するとし、新羅王が安勝を高句麗王に冊立して高句麗を再興したという唐への一連の反逆的行為から「僭帝」と称されたと説く。<sup>29)</sup>

しかし、祚軍は六七〇年に新羅へ派遣されたものの新羅に抑留

され、二年後に他の唐人王芸・王益らとともに唐に戻されたにすぎない。新羅王の謝罪使派遣に祚軍がどれだけ関与したのかは不明で、これを祚軍の功績として墓誌に特記するとは考えにくい。水野実らのいうように、新羅に拘束された事跡は祚軍にとつては不名誉なもので、墓誌には言及されていないと考える方が自然と思われ<sup>30)</sup>。したがって、「僭帝」＝新羅王説も説得力に乏しい。

### (4) 百済王善光説

前稿において私は、倭国にいる百済王善光が一度は王号を返上したこと、また百済王族・貴族ら数十人を率いて熊津都督府に赴くことを約束したが、この約束は果たされなかったと考えた。<sup>31)</sup>この私見は葛継勇から次のような批判を受けた。<sup>32)</sup>

a 天智紀三年三月条の「百済王善光王」の「百済王」は『日本書紀』編者の追記の可能性が高い。

b 禅広(善光)が「藤原朝廷」から与えられた「百済王」は一族にも与えられた百済王姓であり、百済国王を意味するものではない。

c 天智紀元年五月条には、倭が百済王子豊璋を百済王に即位させたところがあるが、『旧唐書』百済伝によると、豊璋を百済王に立てたのは百済僧道琛と旧将福信であり、倭国ではないと唐側は認識している。

以上の理由から、百済王善光を「僭帝」とみることはできない

というのである。しかし、b以外の批判に対しては、次のように反論することにした。

a' 葛は田中史生の指摘をうけてaのように論じているが、田中は集団的呼称としての「百済王」が成立していたとはみなせないという意味で、追記の可能性があると述べているにすぎない。<sup>33)</sup> 帝王をさす「百済王」の意味となれば別の見方ができるのであり、天智紀三年三月条の「百済王」を簡単に追記とみる立場には従えない。

c' 齊明紀六年十月条によると、百済の鬼室福信が倭国に遣使して、王子豊璋を迎えて国主にせんと乞うたため、齊明天皇は豊璋を立てて王とし、塞上を立てて輔とし、豊璋の妻子および叔父忠勝らとともに百済故地に送った。『旧唐書』百済伝が道琛と福信が扶余豊を迎えて百済王としたと書いているとしても、その前提として倭王が豊璋を百済王に立てた事実が存在するのであり、その前提を無視するのは疑問である。その豊璋が白村江戦後に高句麗に逃れたのであるから、倭国へ渡った扶余勇（塞上||善光）を倭王が百済王として遇したであろうことは想像に難くない。

その意味で、天智紀三年三月条に「以百済王善光王等」<sup>34)</sup>、居于難波」とあるのは重みのある記事で、「百済王」を追記とみる考え方には従うことができない。「百済王善光王」という特殊な表記にも注目したい。扶余勇（塞上||善光）は白村江戦後に倭国へ戻り、豊璋に代わる百済王に立てられたのであろう。唐はこれを

「僭帝」（身分を超えて王名を冒している者）とみて問題視し、王名を返上することを求めたものと思われる。豊璋・塞上（善光）とともに倭国から百済に帰った叔父忠勝を『旧唐書』劉仁軌伝や百済伝が「偽王子扶余忠勝」と書いていることも参考になる。

私見に対しては葛継勇が、劉徳高らの一行が百済王族を連れて倭国から戻った記事は確認できないと批判し、大津透も百済王善光は唐へ連れて帰られた訳ではなく、ずっと倭国に住んだので、西本の指摘とはそぐわないと指摘する。<sup>35)</sup> しかし私が件の史料を「僭帝、一旦臣を称す。仍りて大首望数十人を領して、将に入りて朝謁せんとす」と訓読している点にも留意されたい。朝謁せんことを約束したが、この約束は守られなかったと考えれば、何の問題もないであろう。

以上から、「僭帝」の解釈については、高句麗王説・倭王説・新羅王説のいずれも問題が多いため賛成できず、前稿で述べた百済王善光説が妥当であることを改めて確認しておきたいと思う。白村江の大敗を経験し、亡国の百済遺民を大量に受け入れた倭国は、唐・新羅勢力の侵攻を懸念していたであろうし、唐が百済遺民を受け入れた倭国の動向を警戒していたことは当然考えられるところである。<sup>36)</sup> その意味では、白村江戦後の百済故地や百済遺民の動向は無視できるものではなく、これをめぐる唐と倭国の外交交渉にはもつと注目する必要があるのではないか。次節ではその点について検討してみたい。



#### 四 白村江戦後の唐倭交渉

『旧唐書』劉仁軌伝によると、白村江戦後に劉仁軌は長年の征伐で軍兵が疲弊し、恩賞も不十分であることを訴えた上で、高宗に次のように言上したという。

陛下若欲<sup>レ</sup>殄<sup>二</sup>滅高麗<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>棄<sup>二</sup>百濟土地<sup>一</sup>。余豊在<sup>レ</sup>北、余勇在<sup>レ</sup>南。百濟・高麗、旧相党援。倭人雖<sup>レ</sup>遠、亦相影響。若無<sup>二</sup>兵馬<sup>一</sup>、還成<sup>二</sup>一國<sup>一</sup>。

高宗が高句麗を滅ぼそうとするならば、百濟故地を放棄すべきではない。扶余豊（豊璋）は北（高句麗）にあり、扶余勇（善光）は南（倭国）にある。百濟と高句麗は旧来から支援しあい、倭人もまた影響を及ぼしてきた。もし兵馬を撤収すれば、百濟は復興するであろうという。劉仁軌は白村江戦後も百濟遺民と高句麗や倭国との連携を恐れ、高句麗征討成就のためにも、高句麗を孤立させ、日本への警戒を怠らず、百濟故地を保全することが重要であると述べているのである。<sup>39)</sup>

劉仁軌のこうした認識を踏まえて考えると、唐倭交渉の重要性が浮かび上がるであろう。倭国へ逃れた扶余勇（善光）が百濟王として存在感を示していたとすると、この百濟王善光が百濟旧領で抵抗する百濟遺民と結んで、百濟復興の動きを強めることは十分予想されるところである。劉仁軌らの熊津都督府首脳部は、倭人が影響を及ぼし、旧百濟領を一国として再興する可能性を恐れ

ていたとみられるのである。高句麗がまだ存立する時期にあって、倭国に滞在する百濟王善光や多数の百濟王族・貴族は、旧百濟領を再興させようとする半島の勢力と結びつく存在として、きわめて危険な存在とみなされたであろう。

祢軍が白村江戦後の六六四年と六六五年の二度にわたって倭国に派遣されたのは、こうした危険性を取り除くことを大きな目的としていたものと思われる。具体的には倭国が善光を百濟王として遇していることをやめさせ、善光が王号を返上して臣下と称することを求めたのであろう。倭国には高句麗を支援しないように釘を刺すことも忘れていなかったであろう。祢軍の説諭を受けて、善光は臣を称し、配下の旧百濟王族・貴族數十人を率いて唐に赴き、朝謁せんことを約束したのである。ただし実際には、倭国が善光らを熊津都督府に派遣する約束は果たされず、その名代として守大石らを熊津都督府に送ったと考えられるのである。

天智三年（六六四）に来航した唐使郭務悰・祢軍ら、同四年に来航した劉徳高・祢軍らの任務については古くから議論がある。大局的にみると唐は倭に和親を求め、倭もこれに応じて国交が回復されたとする見方が一般的であるが、和親策の内実に関しては、旧百濟領の安全を主眼とする修睦<sup>40)</sup>、高句麗征討にあたり倭国に中立を守らせるための懷柔策<sup>41)</sup>、新羅への對抗策<sup>42)</sup>、倭国の半島反攻を予想した懷柔策<sup>43)</sup>、高句麗を孤立させようとする策など<sup>44)</sup>、さまざまな意見が唱えられてきた。

これらを踏まえて、新蔵正道は唐が新羅から百濟領を保護していることを倭に認めさせ、倭が高句麗を援助することのないように国交を回復したとみる。<sup>45</sup> また、小林敏男は熊津都督府の百濟領占領強化や高句麗への支援の停止などの外交案件が含まれていたとし、祿軍は倭国の半島への再度の軍事侵攻を思いとどまらせ、唐側にとっては恭順や降伏を意味するような原質を引き出すことに成功したと考えている。<sup>46</sup> さらに、盧泰敦は唐は高句麗を孤立させようとする意図で（これには新羅孤立策の性格も含む）、倭との関係を再開せんとしたとする。<sup>47</sup>

以上のような指摘はおおむね正鵠を射ていると思われ、二度にわたって倭国に派遣された唐使は、熊津都督府の旧百濟領保全を確実にするため、倭国が高句麗を支援しないことや、倭国が「百濟王」を擁して再び半島へ来攻しないことを求めて交渉し、倭国との和親を結ぶことに成功したと考えることができよう。おそらく唐は唐軍の倭国侵攻の可能性を示唆しながら圧力を加え、これらの多くを倭国に認めさせたものと思われる。

こうした外交交渉の結果を公の場で示すために、唐は熊津での会盟や泰山での封禪への参加を要請したのである。山尾幸久は郭務悰は扶余隆と金法敏の会盟儀に倭国の臣の参加を要求することを任とし、劉徳高は同会盟への参加を再度要求する任を帯びていたが、これは事実上間に合わなかったので、劉徳高は高宗の封禪儀への倭国の臣の参列を要求したと述べる。<sup>48</sup> 鄭孝雲は、郭務悰

は文武王と扶余隆の会盟に倭王の参加を要求し、劉徳高は唐高宗の封禪儀式への倭使の参加を要求したと論じている。<sup>49</sup> 森公章も劉徳高は泰山封禪への参加を要請するために来航したとする。<sup>50</sup> 六六四年から六六六年にかけては百濟故地の熊津や唐の泰山でこうした会盟の儀や封禪の儀が行われていたから、唐使の目的のなかに倭国使をこれらに誘引することが含まれていた可能性は高いであろう。

『日本書紀』天智四年条には、十二月に劉徳高らに物を賜い、是月に劉徳高らが罷り帰つたと記したあとに、

是歳、遣<sup>二</sup>小錦守君大石等於大唐<sup>一</sup>云々。(等、謂<sup>二</sup>小山坂合部連石積、大乙吉士岐弥、吉士針間<sup>一</sup>。蓋送<sup>二</sup>唐使人<sup>一</sup>乎)

という記事が掲げられている。このときの守大石らが劉徳高らの送使であったのかどうか、大石らが翌年正月に行われた高宗の泰山封禪に参列したのかどうかは議論のあるところであるが、大石の冠位が送使にふさわしくない小錦という高位であること、<sup>51</sup>「蓋送<sup>二</sup>唐使人<sup>一</sup>乎」というのは『日本書紀』編者の解釈で、確定的とはいえないこと、<sup>52</sup>劉徳高らの帰国が天智四年十二月であったのに対して、守大石らの派遣が「是歳」とされて月日が不明であること<sup>53</sup>などからすると、彼らは送使ではなく、劉徳高らが帰国する前に出発し、翌年正月の泰山封禪に参加したとみるのが穏当であろう。<sup>54</sup>

泰山封禪にあたっては、麟徳二年（六六五）十月に高宗が東都

を発したときに「倭国及新羅・百濟・高麗等諸蕃酋長」が扈從した（『冊府元龜』卷三三六、帝王部、封禪第二）。一方、『冊府元龜』卷九八一、外臣部、誓盟には、

劉仁軌領<sup>二</sup>新羅・百濟・耽羅・倭人四國使<sup>一</sup>、浮<sup>レ</sup>海西還、以<sup>二</sup>太山之下<sup>一</sup>。

とあり、劉仁軌は新羅・百濟・耽羅・倭人四國使を領して海に浮かび、西に還ったという。劉仁軌は熊津都督府から倭人ら四國使を領して泰山に向かったものと思われる。劉仁軌が率いた四國使の表記は、いくつかの史料において、

新羅及百濟・耽羅・倭四國酋長（『旧唐書』劉仁軌伝）

新羅・百濟・儋羅・倭四國酋長（『新唐書』劉仁軌伝）

新羅・百濟・耽羅・倭人四國使（『唐会要』卷九五、新羅）

新羅・百濟・耽羅・倭國使者（『資治通鑑』卷二〇一、唐紀、

麟德二年八月条）

などと書かれているが、新旧『唐書』の「酋長」はやや不正確で、それ以外の「国使」「国使者」とあるのを信じるべきであろう。

高宗とともに東都を出発した「倭国」「酋長」は通説のいうように白村江戦の捕虜とみてよいだろうが、後者の「倭人国使」「倭国使者」は守大石らの遣唐使とみるべきであろう。守大石らは六六五年中に熊津都督府に到着し、劉仁軌に率いられて泰山封禪に参列したものと考えられる。高宗の泰山封禪は唐の朝鮮侵攻の成功を国内と海外諸蕃王に認めさせる儀式であったから、これに倭国

使が参列することは、唐や熊津都督府による半島支配を追認することを意味した。こうした事情から、倭国は「百濟王」を擁して半島に再攻することも、高句麗を支援することも断念せざるをえなかったのである。

『日本書紀』では天智三年三月条以降、亡命百濟王族に関して「百濟王」を冠する表記はみえなくなり、天武三年（六七四）正月条に「百濟王昌成」、同四年正月条に「百濟王善光」として再登場する。この間、倭王は祢軍ら唐使との約束を守って、百濟王を冊立することを停止し、高句麗への支援も行わなかったであろう。高句麗滅亡後に「百濟王」は氏姓として善光の一族に与えられるようになる。

吉川真司はこの時期の唐倭交渉を次のように簡潔明瞭にまとめている。<sup>56</sup> 郭務悰の来航目的は唐への協力、とくに百濟支配への同調を命じることであった。倭には百濟王子（扶余勇<sup>〓</sup>禪広）がおり、唐はその影響力や、高句麗に逃れた扶余豊（豊璋）との呼応を恐れていた。敗残の倭を従わせ、百濟の不安定化を防ぎ、高句麗再征を実現することが唐の国家意志であった。守大石らは劉徳高の送使とみるのが穏当だが、十二月より早く出発したとすれば、泰山封禪に参列したことも考えられ、そうとすれば、倭は高宗への恭順を強く示したことになり、それは高句麗を見捨てることを意味した。以上の記述は唐倭交渉の背景に想定される当時の複雑な東アジア情勢を要説したもので、本稿の立場とも通じるもので

ある。

### おわりに

以上に述べてきたことを踏まえて、前稿の結論と対照する形で本稿の結論を示せば、次のようになる（前稿の結論を修正した箇所、あるいは新たに考察を加えた箇所は傍線を引いた）。

- (1) 祢軍墓誌にみえる「日本」は国号ではないが、ここにみえる「日本」「扶桑」「風谷」「海左」「瀛東」はいずれも倭国をあらわす別称として使用されている。
- (2) 「日本の余嚙」と「風谷の遺叱」はともに本国に逃れた倭国の軍兵を意味する。
- (3) 「風谷の遺叱」は高句麗の残存勢力を意味する可能性もあるが、祢軍墓誌に高句麗のことが言及されているとは思えず、「風谷の遺叱」は倭国軍兵の残党であると解釈できる。
- (4) 「万騎野を亘り」と「千艘波を横ぎり」の対句表現は、「日本の余嚙」や「風谷の遺叱」すなわち倭国がまだまだ大きな陸海の軍勢を有していることを述べたものとみられる。祢軍が倭国に派遣された際に、筑紫から難波までの航路上や菟道（宇治）での「大閼」で軍船や軍兵を実見した状況を踏まえた描写なのであろう。
- (5) 六六四年と六六五年の二度倭国に來航した祢軍の任務は、百濟遺民を含めた倭国の勢力を熊津都督府へ招き寄せることであり、この任務を果たした功績が祢軍墓誌で強調されている。すなわち、祢軍は倭国出使後に左戎衛郎将を授けられ、その後、六七〇年四月ごろに右領軍衛中郎将兼檢校熊津都督府司馬に昇進したと考えられる。
- (6) 祢軍墓誌に「僭帝、一旦臣を称す。仍りて大首望數十人を領して、将に入りて朝謁せんとす」とあるのは、倭国にいる百濟王善光が一度王号を返上したこと、また百濟王族・貴族ら數十人を率いて熊津都督府に赴くことを約束したことを意味する。
- (7) ⑥の約束は果たされなかったようで、倭国はその名代として守大石らを熊津都督府に派遣した。彼らは劉仁軌に率いられて翌年正月に行われた泰山封禪に参加した可能性が高い。六六〇年の百濟滅亡とそれ以降の百濟復興運動のことを考える際には、その時点から一八五年前の百濟滅亡とその復興過程を振り返る必要がある。四七五年に高句麗が百濟の都漢城を攻めて蓋鹵王と太后・王子等を殺害し、ここに百濟は滅亡した。このとき蓋鹵王の子文周が南に逃れ、都を熊津に遷して文周王となり、百濟を再興した（『三国史記』百濟本紀、『日本書紀』雄略二〇年冬条所引「百濟記」）。田中俊明は文周王は王になることを予定された人物ではなかったが、国そのものが滅亡の危機に瀕したときに再興をはかった人物であったとし、漢城陥落時に蓋鹵王と王后・王子らはみな没し、かろうじて生き残ったのは、倭国に滞在して

いた昆支（軍君。蓋鹵王の子）のみであったため、文周王のあと  
の王位は昆支の子である東城王や武寧王に継承されたという。<sup>(57)</sup>

こうした過去の歴史を振り返ると、六六〇年の百濟滅亡に際し  
ても、倭国に滞在していた王子豊璋や善光の存在に故国再興の期  
待がかけられたのは当然のことで、実際に鬼室福信らの要請を受  
けて倭王は豊璋を百濟王とし、善光をその輔として百濟旧地に送  
った。白村江戦後、豊璋は高句麗へ逃れたが、倭国へ戻った善光  
を倭王は新たな百濟王に擁立したものとされる。祢軍はこのよ  
うな状況下に二度倭国へ派遣されたのである。

両度にわたる唐使の目的は同じであったろう。<sup>(58)</sup> 熊津都督府によ  
る旧百濟領の保全を確実なものとし、高句麗征討を成就するため  
に、倭と百濟遺民、倭と高句麗の結合を断ち切ることを求めたも  
のと思われる。とくに倭国で新たな百濟王に立てられた善光王の  
存在が百濟再興に道を開くことを恐れ、「僭帝」たる善光が王号を  
捨て、旧百濟貴族らを率いて熊津都督府もしくは泰山封禪に赴く  
ことを強く要求した可能性が高い。

善光らの封禪参列は実現しなかったが、倭王は百濟王擁立を断  
念し、善光らの名代として守大石らの遣唐使を泰山封禪に派遣し  
た。祢軍は倭国使を熊津都督府や泰山封禪に誘引した功績で、倭  
国出使後に左戎衛郎将に、さらにのちに右領軍衛中郎将兼校熊  
津都督府司馬に昇進した。祢軍墓誌に特記された祢軍の功績は二  
度にわたる倭国への出使に伴うもので、そうであれば、墓誌に記

された「日本」「風谷」の語はいずれも倭国を意味するものと考え  
られるのである。

#### 注

- (1) 西本昌弘「祢軍墓誌の「日本」と「風谷」」〔日本歴史〕七七九、二〇一三年四月。
- (2) 葛継勇「風谷」と「盤桃」、「海左」と「瀛東」〔東洋学報〕九五―二、二〇一三年九月、二〇頁、井上亘「禰軍墓誌「日本」考」〔東洋学報〕九五―四、二〇一四年三月、一二頁、富谷至「漢倭奴国王から日本国天皇へ」〔臨川書店、二〇一八年〕一九四―一九五頁。
- (3) 葛継勇注(2) 論文二〇頁、井上亘注(2) 論文七頁。
- (4) 「沚を縦にす」の「沚」は水際の意で、ここでは水際を自在に進むこと、海岸線沿いに水軍を進めることであろうとする水野実らの指摘に従う。水野実・松野敏之・大場一央「禰軍墓誌」考〔歴史研究〕六三八、二〇一六年、七五―七六頁。
- (5) 王連龍「百濟人「祢軍墓誌」論考」〔古代学研究所紀要〕一七、二〇一二年六月。
- (6) 東野治之「百濟人祢軍墓誌の「日本」」〔図書〕七五六、二〇一二年二月、同「日本国号の研究動向と課題と」〔東方学〕一二五、二〇一三年一月。なお、大津透 a 「中国からみる古代日本」〔史学雑誌〕一二一―七、二〇一二年七月、同 b 「律令国家と隋唐文明」〔岩波書店、二〇一〇年〕、神野志隆光「日本」国号の由来と歴史〔講談社、二〇一六年〕などは東野説を支持している。
- (7) 西本昌弘注(1) 論文。
- (8) 葛継勇注(2) 論文。
- (9) 井上亘注(2) 論文。
- (10) 李成市「六一八世紀の東アジアと東アジア世界論」〔岩波講座日本歴史〕二、二〇一四年三月。



- (11) 氣賀澤保規「東アジアにおける「日本」の始まり」〔白山史学〕五〇、二〇一四年五月。
- (12) 小林敏男「祇軍墓誌銘の「日本」と白村江戦前後」〔大東文化大学紀要〕一四、二〇一六年。
- (13) 古代東アジア史ゼミナール「祇軍墓誌訳注」〔史滴〕三四、二〇一二年十二月、葛継勇注(2)論文。
- (14) 『日本書紀』天武十三年閏四月丙戌条の「閔」の用例から、「閔」は閔兵を意味したことがわかる。
- (15) 王連龍注(5)論文一九一〜一九二頁。
- (16) 西本昌弘注(1)論文九一二頁。
- (17) 井上巨注(2)論文一三頁。
- (18) 水野実・松野敏之・大場一央注(4)論文七九頁。
- (19) 小林敏男注(12)論文七〇頁。
- (20) 葛継勇注(2)論文一七頁、李成市注(9)論文。
- (21) 富谷至注(2)著書一九七頁。
- (22) 井上巨注(2)論文五頁、二二頁。
- (23) 葛継勇「東アジア情勢における祇軍の活動と官歴」〔朝鮮学報〕二二〇、二〇一四年一月。
- (24) 古代東アジア史ゼミナール注(13)論文一七五頁。
- (25) 王連龍注(5)論文一九二〜一九三頁。
- (26) 葛継勇「祇軍墓誌の発見と研究課題」〔日本歴史〕八〇四、二〇一五年) 八三頁。
- (27) 井上巨注(2)論文一三頁。
- (28) 井上巨注(2)論文二八頁。清原倫子「中国出土の墓誌にみる亡命百濟人について」〔高倉洋彰編「東アジア古文化論攷」一、中国書店、二〇一四年)も「僭帝」天智天皇説である。
- (29) 李成市注(10)論文二三五〜二三七頁。
- (30) 水野実ほか注(18)論文七九頁。
- (31) 西本昌弘注(1)論文九二頁。
- (32) 葛継勇「祇軍の倭国出使と高宗の泰山封禪」〔日本歴史〕七九〇、二〇一四年三月) 一三〜一四頁。
- (33) 田中史生「王」姓賜与と日本古代国家」〔日本古代国家の民族支配と渡来人〕校倉書房、一九九七年) 五一頁。
- (34) 葛継勇注(32)論文一四〜一五頁。
- (35) 大津透注(6)著書六九頁。
- (36) 西本昌弘注(1)論文九二頁。水野実ほか注(18)論文七五頁も「將に入謁して謁せんとす」と訓読しており、私見に近い読み方をしている。
- (37) 川本芳昭「白村江の戦いと東アジア古代における世界秩序の変動」〔世界秩序の変容と東アジア〕〔汲古書院、二〇一二年) 七二頁、八一頁。
- (38) 河上麻由子「古代日中関係史」(中央公論新社、二〇一九年) 二二九頁。
- (39) 鈴木靖民「百濟救援の役後の日唐交渉」〔続日本古代史論集〕吉川弘文館、一九七二年) 三二四〜三二五頁、松田好弘「天智朝の外交について」〔立命館文学〕四一五・四一六・四一七、一九八〇年) 一〇三頁、仁藤敦史「白村江敗戦後の倭国と新羅・唐関係」〔東西人文〕一四、慶北大学、二〇一〇年) 一九九頁。
- (40) 池内宏「百濟滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の関係」〔滿鮮史研究〕上世第二冊、吉川弘文館、一九六〇年) 二〇六頁、鈴木靖民注(39)論文三〇四頁。
- (41) 森克己「遣唐使」(至文堂、一九五五年) 一一九頁、
- (42) 関晃「大化改新」〔岩波講座日本歴史〕二、一九六二年) 二二四〜二二五頁、
- (43) 瀧川政次郎「七世紀の東亜の政局と日本書紀」〔日本書紀研究〕六、一九七二年) 二〇四頁。
- (44) 鬼頭清明「白村江」(教育社、一九八一年) 一六五頁。
- (45) 新蔵正道「白村江の戦」後の天智朝外交」〔史泉〕七一、一九九〇年) 一〇〜一一頁。
- (46) 小林敏男注(12)論文六四頁、七〇頁。

- (47) 盧泰敦『古代朝鮮三国統一戦争史』(岩波書店、二〇二二年)一六五～一六八頁。
- (48) 山尾幸久『古代の日朝関係』(塙書房、一九八九年)四二六～四二七頁。
- (49) 鄭孝雲「白村江の戦い後の対外関係」『古代文化』四五十三、一九九三年)二七頁。
- (50) 森公章『天智天皇』(吉川弘文館、二〇一六年)一七八頁。
- (51) 日本古典文学大系『日本書紀』下(岩波書店、一九六五年)補注271七。
- (52) 山尾幸久注(48)著書四二六～四二七頁。
- (53) 鄭孝雲注(49)論文二五頁。
- (54) 守大石らが泰山封禪に参列したとみるものに、注(51)の『日本書紀』下補注、石母田正『日本の古代国家』(岩波書店、一九七一年)六九頁、鈴木治『白村江』(学生社、一九七二年)五八頁、山尾幸久注(48)著書四二六～四二七頁、王勇『唐から見た遣唐使』(講談社、一九九八年)二九頁、鄭孝雲注(49)論文二五頁、小田富士雄「白村江戦の戦後処理と国際関係」『古代九州と東アジア』Ⅲ、同成社、二〇二〇年)五〇二頁などがある。なお、注(51)の『日本書紀』下補注は遅刻参加説である。
- (55) 石母田正注(54)著書六九頁。
- (56) 吉川真司『飛鳥の都』(岩波書店、二〇一一年)九九頁。
- (57) 田中俊明「百済文周王系の登場と武寧王」『高麗美術館研究紀要』五、二〇〇六年)。
- (58) 新蔵正道注(45)論文一二頁、山尾幸久注(48)著書四二七頁。

# Re-examination of the Deigun epitaph

NISHIMOTO Masahiro

Deigun was a high-ranking Kudara official who had Chinese ancestry. He surrendered to the Tang when Kudara fell in 660, and following this, he was an intermediary between the Tang and Wakoku and Siragi, and he was active in diplomatic negotiations. In 2011, an epitaph on Deigun was discovered in Xi'an, China. In 2013, the author published a study of this epitaph, which received criticism by several researchers. This paper will respond to these critiques and correct certain deficiencies in the previous paper. The relevant conclusions are as follows.

- (1) The word “Nippon” in the Deigun epitaph does not represent the name of the country; instead, “Nippon” and “Fukoku” are used as alternate names for the country of Wakoku.
- (2) The phrases “Nippon’s remains” and “Fukoku’s remains” refer to soldiers from Wakoku who fled to their home country.
- (3) The mission of Deigun, who visited Wakoku twice in 664 and 665, was to invite envoys from Wakoku to the Chinese governing structure located in the former territory of Kudara. It appears that Deigun was promoted as a result of his having fulfilled this mission, as recorded in the Deigun epitaph.
- (4) The Deigun epitaph states “The person who is pretending to be the king is planning to give up the title of king and go to Tang with his leaders to apologize to the Tang emperor.” This indicates that Zenko, the King of Kudara, who was staying in Wakoku, had apparently renounced the title of King of Kudara and promised to lead the royal family of Kudara to Tang.
- (5) It appears that this promise was not kept, and Zenko instead dispatched envoys to Tang, including Morino Oishi, on their behalf. It is likely that these envoys attended the ceremony held on Taizan in January 666.

キーワード：祢軍墓誌 (Deigun epitaph)、日本国号 (The name of the country Nippon)、唐倭交渉 (Diplomatic negotiations between Tang and Japan)、東アジア情勢 (Situation in East Asia)